



# 北区の部屋だより

2024年6月 第178号



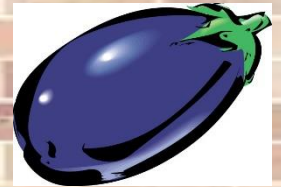
刊行物登録番号 5-2-167

編集発行：北区立中央図書館「北区の部屋」〒114-0033 北区十条台1-2-5 TEL03-5993-1125 令和6年6月発行



北  
区  
こぼれ話  
第178回

## 江戸時代、北区域の村々の 名産？！大根・瓜・茄子



江戸時代の北区域の村々の様子が知られる史料として安政2年(1855)に作成された「武州足立郡川口・豊島郡岩淵両宿組合三拾三ヶ村地頭性名其外書上帳」という帳簿があります。これは浮間村を除く北区域の村々が属していた「川口・岩淵両宿三拾三ヶ村組合」について、各村の石高や家数、人口、各領主の姓名、さらには村内の名所旧跡などを書き上げた帳簿で、組合村を支配する関東取締出役に提出されました。『北区史資料編近世2』（東京都北区、1995年）に全文が掲載されているので興味のある方はご覧いただければと思いますが、ここに村で生産されている作物が「所産物」として書き上げられており、各村でどのようなものを作っていたかを知ることができます。

さて、この史料を改めて見ていくと、岩淵宿および区内16の村のうち下村、袋村、赤羽根村、上十条村、下十条村、上中里村、中里村、梶原堀之内村、滝野川村、稲付村、田端村と、実に11の村で「大根・瓜・茄子を作り、江戸へ売り出し候」とあって、大根、瓜、茄子の生産が盛んだったことが知られます。これだけを見ると「へえ～、北区って昔、大根や瓜、茄子なんか作っていたんだ」で終わりなのですが、これは本当なのでしょうか。

例えば、地形的に見ても滝野川村や稲付村などが沖積層である武蔵野台地上に位置する村である一方、下村や梶原堀之内村

は東京低地に位置しています。こうした村々が、主として同じ作物を生産していたとは到底思えないのです。では、何故、このようなことになっているのでしょうか。実は、江戸時代にはこうした村柄を書き上げ提出する際には、それを伝える通達とともにこうした形式で書きなさいといった雛形と一緒に回ってくることが往々にしてあります。その雛形を手本にしつつ、家数や人数、領主の姓名などはそれぞれの村で正しく書き上げたものの、「所産物」については、雛形に書いてあった「大根・瓜・茄子を作り、江戸へ売り出し候」をそのまま書き写し提出したことが想像できるのです。「特記するほどの産物ではないが、まあ、うちの村でも作っているからこれでいいや」といったぐらいの感覚だったのかも知れません。事実、明治期に作成された『東京府志料』では、この11の村のうち大根（萊菔）、瓜（越瓜）、茄子を物産として挙げているのは赤羽根村、上十条村の2ヶ村だけで、茄子を書き上げているのは先の2ヶ村を含めても4ヶ村のみ、大根は少し多くて8ヶ村となっていますが下村や上中里村、梶原堀之内村に至っては大根も瓜も茄子も物産として記載していないのです。

史料がないと昔の様子がわからないのも事実ですが、史料があるからといって、それが本当なのかどうかは、また、別の問題なのです。

（地域資料専門員 保垣孝幸）

## 北区の部屋 今月の展示

# 北区の都電停留場

- 展示期間：5月24日（金）～6月26日（水）
- 展示場所：「北区の部屋」企画展示コーナー

現在、都電荒川線（東京さくらトラム）の停留場は30。  
このうち6つの停留場が北区に所在しています。

今回の展示では、沿線案内ではなく、この停留場自体を  
中心に紹介します。



## ～ 古文書入門講座「古文書でみる江戸時代の北区」はじまりました ～



講師：日本近世史研究家  
保垣孝幸 地域資料専門員

5月10日（金）に古文書入門講座（全6回）が開講しました。古文書を読み解くための基礎知識や字典の使い方を学びながら、くずし字を一文字ずつ読み解いていきます。テキストは北区に残る実際の古文書です。古文書特有の表記方法や言い回しだけでなく、その時代背景も解説していくため、訳し終えると、当時の北区の村々の様子や農民の生活が目浮かぶようでした。受講生の皆さんは、大変集中して古文書に取り組んでおり、古文書に対する関心の高さが伺えました。



## 中央図書館 展示のご案内

### お札とお札になった人々

渋沢栄一 新一万円札発行 カウントダウンプロジェクトの一環として、中央図書館では関連展示を行います。  
また、北区の部屋では、渋沢栄一翁に関連する資料を常設展示しております。この機会にぜひ、お立ち寄りください。

- 【展示期間】 令和6年6月1日（土）～7月24日（水）
- 【展示場所】 中央図書館 1階

